

## 巻 頭 言



### 世界の最高水準へ

Towards the World's Highest Level

上野 建二郎\*

日本の鉄鋼業が世界の市場において、他国のそれと競争できる為にはどうしてもその成品の製造価格が低廉で、しかもその品質が優秀でなければならない。その為には原材料管理、作業管理、工程管理、設備管理、品質管理、安全衛生管理、労務管理等すべての管理が完全であり、かつまた能率的でなければならない。すなわち言葉をかえてこれをいうならば世界の最高水準に達していなければいけないのである。

終戦後鉄鋼界の大メーカーは設備の近代化に努力せられつぎつぎと近代設備を輸入されて、その生産体制は全く変貌するに至った。従つてこの点においては世界の最高水準に達したといえるが、併しこの設備の管理はじめ他の管理面において世界の水準に達したかどうかは疑問である。大メーカーの伝統的非能率性が近代設備の影に潜在しておりはしないだろうか。また中小メーカーはどうかというと銀行から借りられるだけの借金をし、また時流に乗つて増資をしたりして設備の合理化を行い時代に遅れをとるまいと努めているが到底大メーカーにおよぶべくもない。併し中小メーカーの中には設備の不充分さを管理面で補い意外な能率的作業を行つている所もある。こういう様な鉄鋼業を世界の最高水準へという事はなかなか困難な事かも知れない。併し日本の鉄鋼業界および学界が本当にその目標の旗印を掲げて立ちあがるならばできない事ではないと私は考える。私はこの為にはどのようなやり方が良いかと長い間考えておつたが最近漸くまとまりがついたので、ここにその案を示して識者の御批判を仰ぎたいと思う。

日本鉄鋼連盟、日本鉄鋼協会、日本学術振興会が協力して世界水準達成の運動を起すことである。そして三者それぞれの立場において、その目的達成の為の具体的措置をとるのである。すなわち日本鉄鋼連盟の理事会で先ず世界水準達成運動をしようという決議をする。そして調査委員会を設け連盟の調査部が幹事役となり、世界の鉄鋼業の水準がどの辺にあるかを調査する。この委員会は小委員会また要すれば分科会をおき製鉄、製鋼、圧延等の作業の状況を詳細に調査し世界の水準がどの辺にあるかを発表する。また鉄連には労働部会が現存し安全衛生委員会等もあるので、これを活用し労働基準局等と協力して日本の鉄鋼各社の安全衛生管理、労務管理の全体的向上を図る。また事務能率向上の共同研究会を設け事務能率の世界水準達成を旨として努力をする。

日本鉄鋼協会においては鉄鋼技術協同研究会がありこれに色々な部会があつて、それぞれ活動せられておるからこれに基本をおくべきだと思う。唯この協同研究会は機構を改めて各地区別におき部会の種類分科会も多数もうけて成るべく多くの会社技術者を包含すべきだと思う。

そして必ず毎月一回は会合を催して技術水準の向上につき協議研究を行うべきである。地区別に行えばこれは実行できる事である。全体の会議は年に2回乃至3回各地区もち廻りで行えばと思う。

学術振興会においては従来から19委員会、52委員会がありこれに分科会、協議会等が沢山あり、各

\* 本会評議員、日本砂鉄鋼業株式会社常務取締役

大学の教授、助教授、各研究所の研究員、会社の研究、試験関係の技術者等によつて共同研究が行われている。この行き方には深く敬意を表したい。

今後物理試験、化学試験の方法においてどんどん検討を進めて頂き新しい方法が決定されたらそれについての講習会を各所で催して、その普及徹底を図つて頂きたい。ただ開催日が各大学の教授の御都合から休暇中に日を集約され連日開催されるので事業会社の技術者の多忙の者は出席できない時が多いのは残念である。これも地区別に例月特定日に開催しその成果を年3回位もちよる様にでもして頂いた方が共同研究の効果をより大にするのではないか。

かくの如く日本鉄鋼連盟、日本鉄鋼協会、日本學術振興会がその委員会、研究会の部会、分科会等になるべく多くの有能な技術者を収容して、活発なる共同研究を行えばその成果は必ずや大なるものがあると思う。通産省重工業局の後援また日本金属学会の側面援助も是非希望したい所である。

日本の科学技術者の数は欧米に比して遙かに少ない。この少ない技術者のうち鉄鋼界に關係しておる技術者はまた狭い範囲に限定されておる。すなわち極めて少ないのである。それにも拘らず一会社を停年にて退職して不遇をかこつておる人や、旧軍時代の技術将校だつた為に不遇の人や、現在会社に勤めていても会社がその人の技術を利用しない場合や、また公開せしめない場合等日本の技術者の活用は充分に行われておらないのである。若し上に私が述べた如く委員会共同研究会の運用が旨く行き活発なる活動が行われたならば不遇をかこつ技術者、卑肉の嘆をかこつ人もなくなつてきて最も良き技術活用の途が開かれると私は確信する。また岩瀬博士も巻頭言にて述べられた様に、これからの冶金技術の進歩は化学部門の技術者の応援なしでは駄目である。現在においても耐火材料、電極、酸素等の良否が鉄鋼の生命に關する問題となつている。今後はさらに水素、窒素、アルゴン、塩素、弗素等のガスの利用、特殊稀元素の利用、廃ガス、鋼滓等の化学的利用等化学の高度の知識を要することが多くなるであろう。この意味からすれば鉄鋼業は化学工業でもあるのである。また鉄鋼業は運搬業だともいわれている。すなわち機械技術者の応援なしには如何なる事もできない。また電気の技術についても同様である。殊に電気製鋼会社、フェアラロイの会社、電気鉄の会社等においては電気技術の良否は会社の運命を左右するものである。従つて鉄鋼技術協同研究会には冶金技術者の外に化学、機械、電気等の部門の技術者をも包含すべきである。

要は日本鉄鋼業の世界水準到達の一手段として關係のある事務屋、技術屋の総動員体制を民主的にとのえようというのである。上は鉄鋼業界、同学界の大御所より下は大学高校の新卒業生まで世界水準達成運動に協力したならば必ずこの目的は達成できることを確信するものである。